

提督になってまで

白紙白紙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕が提督になったところでもできないですよ。

それでも少しだけがんばろうと思ったのがんばってみようと思います。

目次

第一話	提督が着任しました	1
第二話	本当になにもない	6
第三話	あなただけのもの	12
第四話	お姉さん。信じてみようかしら	20
第五話	掃除とジャージとメイド	31
第六話	一航戦と女の感	43
第七話	頑張る一航戦と説得	53
第八話	長門と川内	67
第九話	気分高揚	81

第一話 提督が着任しました

「提督になつてもらいたい」

大本營の一言で僕は提督になるみたいです。

「君には素質があるのだと思う。曖昧な言い方だがこれからよろしく」

これが回想。僕の考える限り最も簡潔な回想だ。

そんな感じで僕は提督になつたとき……。

#####

車に乗り、三時間とちよつと。だんだんと目的地に近づいてきたと思う。景色は開け、海が近くに見えるようになった。

今日から僕は提督になるらしい。

恐らく大本營の左遷であろう。使えるものは死ぬまで使う。

軍でそこそこの仕事をした僕がそう簡単に軍を辞められるとは思つてもいない。これから始まる事に比べれば、いつその事牢屋にぶち込まれる方がよかつたのかもしれない。

い。

「そろそろ着きます。身支度をお願いします」

僕の隣に座る巨体は恐らくその辺の軍人とは違うのであろう。淡々と仕事をこなす機械にも見えた。

「ご丁寧ありがとうございます」

一応礼をしておく。僕みたいな体を動かさない軍人ではあの巨軀にはかないそうにない。

これから向かう鎮守府の資料は手元にある。ブラック鎮守府と言われている場所だ。

ひたすらに私利私欲を満たし、艦娘を虐待していたと、元提督からの証言だ。僕が直接聞いた。

「それにしても酷いですね。国家の存亡に関わる大切な艦娘達に酷い事をするなんて。

隣の巨体に話しかけているつもりだが、返事はない。

「僕も実際に艦娘達を見た事はありませんが、年齢的には少女といって差し支えない女性なんですよ。そんな少女を虐待するなんて趣味がいいのか悪いのやら」

やはり返事はない。僕の言葉が独り言になったあたりで、運転手が口を開いた。

「到着いたしました」

「これから僕の提督ライフが始まるらしい。」

#####

本日の一〇〇〇〇にこの鎮守府に新しく提督が着任すると情報が入ったのは一週間、それについての議論はいろいろとありました。

しかし、それでは私たち艦娘は解体されるかわからない。一応形式だけは見繕うことになり、私は鎮守府の入り口で提督を待っている。

「加賀さん。次に来る提督はどのような人なのでしょう」

「わからないわ。それでも、前の提督よりもまともで在る事を願うわ」

「そうね。そうだといいのですが……」

赤城さんが心配をしていますが無理ありません。それにいきなり新しく提督が着任するといつても誰も信用できません。私たちが受けた屈辱的な毎日は今さら元には戻りません。

「大本営がこの鎮守府を解体せずについてくれただけありがたいと思いたしましょう」

赤城さんは前向きではありませんけれど無理をしているのは明らかです。足も声も震えています。

「あの車ではないでしょうか？」

赤城さんがこちらに走ってくる軍用車を見つけました。このあたりで車が走ることは滅多にありません。新しい提督が乗っているでしょう。

「そうね……」

私は不安でいっぱいでした。名誉ある一航戦でもこれまでの事を考えれば仕方ないのかもしれない。それでも私は希望を持ってしまいました。艦娘である私の心はどうしても海で戦う事を望んだのかもしれない。

考えているうちに我が鎮守府の門の前に車が止まりました。

ドアが開く瞬間世界は少しだけゆっくりと時間が流れている気がしました。

「お待ちしておりました」

提督が私たちの前に出てきます。失礼のないよう今できる最大限の気力で私たちは挨拶をします。

「やあ」

すると気の抜けた返事が帰ってきました。

「君たちがここの艦娘つてヤツかな？はじめまして。これから新しく提督になるものです。どうぞよろしく。それとあんまり気を張らなくて大丈夫だよ。ここには憲兵なんていないだしね」

新しい提督はざつくばらんに返事をして門を通り過ぎてしまいました。

「時間はあるようでないでしょ。これから1時間後にトラックが来ると思うから物資の搬入を手伝って。それととりあえず立ち話は終わりにして。どこか適当な部屋にでも案内してよ」

「わかりました……」

赤城さんと私は何が起きているのかもわからず彼を執務室へと案内する事にしました。

このような軍人がいるのかと疑問に思いました。赤城さんも困惑しているようです。少しだけ顔が引き攣っています。

こうして私たちは提督と出会ったのです。

第二話 本当になにもない

執務室に案内するといわれてついて行つたまでにはいいが、そこから問題だった。

何もないのである。そもそも鎮守府といつたら大きな建物を創造していたが実際は二階建てのプレハブ小屋だった。

「これってどういう事なの？」

前の提督の情報によると、それはもう立派な建物があったと写真付で説明があつたがそのようなものは一切ない。

僕は違う鎮守府に来たのかと思つたが、どうやらここであつていろいろらしい。

「前任の提督が逮捕された際、横領などの罪で資材は全て没収されました。また建物は妖精さんたちが力を失つたため破壊されました。今この敷地に残っているのは資材倉庫、工廠、食堂、入渠場、我々が寝ている建物のみになります」

妖精さんの力は噂には聞いていたが、ここまで影響するとは思つてもいかなかった。情報だけを鵜呑みにした結果がこれである。

「提督が着任すると聞いて業者が1ヶ月ほど前にこのプレハブ小屋を建てました。急な着任だったためこのような形になりましたがご容赦ください」

髪をサイドに結った、青い方が答える。

「それにしたってここまで酷いとは思わなかったよ」

十畳程の部屋に会議用テーブルが二つ並べて置かれている。そして事務椅子。部屋の隅にゴミ箱。申し訳程度に壁に掛かっている時計。これがこの鎮守府の司令部だ。

「まあ仕方ないか……」

考えたところで何かが解決するわけではない。そもそも解体予定だった鎮守府とも聞くしこのような事態になってもおかしくはない。

「ところで君たちの名前を聞いていなかったけどちよつとした自己紹介をしてくれないかな？」

そういえば忘れていた。さつきから事務的な口調で話している青い方と、髪の長い赤い方。区別はしやすいが名前があるならそれで呼んだほうがいいだろう。

「私は加賀です。航空母艦です」

青い方が加賀ね。航空母艦。

「私は赤城です。同じく航空母艦になります」

赤い方が答える。

「加賀と赤城ね。覚えた」

航空母艦、所謂空母か。

執務室がこんなのでは仕方ない。私物をトラックに積んでいたのでまだ助かった。

「これから荷物が来るからそれを片付けて次の仕事だ。一三〇〇時にグラウンドでいいのかな？この鎮守府にいる全艦娘に集合するように伝令をお願い。ちよつと大変な作業だけがんばってね」

#####

新しく着任した提督はそう言うと言おうと執務室を出て行きます。軽く自己紹介が終わったところでいきなり仕事だそうです。彼もまた前の提督と同じく、私たちに酷い事をするのでしょうか？隣にいる加賀さんも彼を見定めるかのような目つきで見えています。

「加賀さん、新しい提督は何を考えているのでしょうか？」

「わからないわ。それでもこの執務室を見て私たちを怒鳴り散らして罰を与えなかった時点で前の提督よりも十分に人間性があると思えるわ」

確かにそうです。前の提督ならこのような不備があつた場合、感情的過ぎるほどに私たちを叱り付け、懲罰室に連行していると思います。

「とにかく今は彼に従うしかないわ。もし逆らつたら何をされるかわからないもの」

加賀さんはそう言うと言おうと執務室から出て行きます。加賀さんも前任の提督にいろいろ

と酷い事をされていたと言うのに切り替えが早いです。私はそこまでの強さはありません。

しかし考えたところで結果は変わらないので加賀さんの後を追っていきます。

|||||

加賀さんの後を追うと提督がプレハブ小屋の前で煙草を吸っていました。

「ねえ、君たちは僕の事をどう思ってるか知らないけど、そんなに偉い人間でもないし、人格者という訳でもない。前の提督の事を忘れろというのは無理な話だろうけど気長に気楽にやっていきましょう」

気の抜けた声に調子が狂う。加賀さんを見ると怒っているみたいだった。

「失礼ですが提督、我々は兵器です。そのような感情で任務を疎かにするわけにはいきません」

「兵器だけに平気って……、これはなかなか」

提督は加賀さんの感情を読み取ろうともせず飄々と話しています。

「それにしても本当に何も無いね。ここまで更地だといろいろとできそうだ」

提督は加賀さんに答えるわけでもなく言います。煙草を消して携帯灰皿に捨てる

すたすたと歩いていきます。

「ちよつと道案内を頼むよ。この鎮守府の建物くらいは把握したいからさ」

「そう言つて彼はまた歩き出します。人の事を考えず適当に話、適当に行動する彼の考えは私にはわかりません。しかし、ついていかなければ何をされるかわかりません。選択肢はあつてないようなものです。」

加賀さんもそれをわかつているようで、彼の後ろをゆつくりと追いかけます。案内してくれといわれたのに先頭を歩いては意味がないと思います。

私も彼と加賀さんの後を追いかけます。

|| || || || ||

「ここで最後になります」

加賀さんがそう言つて資材倉庫を案内します。

「わかつてはいたけど資材庫つて言つても何もないから意味がないね」

前任の提督のせいで資材はほとんどありません。

「もういいや。そろそろ時間だし門まで行くこうか」

彼はそう言つて歩き出します。

私たちも彼の後を追いかけます。

門に着くとちよūdトトラックがコンテナを引つさげやつてきました。

彼は運転手と話し、礼を言つてこちらに歸つてきます。

「とりあえず直ぐに仕舞わないと駄目なものは僕たちで運ぼう。こつちのコンテナに入つてゐるらしいから三人で手分けしてね。」

「わかりました。しかし、提督自ら動かなくても雑用であれば私たちが片付けます」

「いいんだよ。今日ぐらゐは働く。楽をするのはその次から。それより早く運ぼう」

彼はそう言つてダンボールを持ち上げました。

「一週間は確保したからそれがなくなつてから考えようか」

独り言を言いながら彼は歩いていきます。それを見て私たちもダンボールを持ち上げ彼についていきます。

「これはどこに運ぶのでしょうか」

私は気になり彼に問いかけます。

「食堂だよ。腹が減つては戦はできぬつてやつだよ」

彼はそう言うともた歩き始めました。

「加賀さん。もしかしてこれはご飯ですか？」

第三話 あなただけのもの

「荷物は適当に置いて。冷蔵庫に仕舞うものは勝手に入れておいて、大まかな整理は後でやるから」

提督は私たちにそう言つて片づけをします。

「後君たちは食堂の片付けをお願い。これだけ酷いと掃除しないと使い物にならない。まずは食堂からだね」

私たちに掃除を任せ、提督は厨房へと消えていきます。

「もしかして料理を作るのでしょうか？」

不思議に思い加賀さんに聞いてみます。

「私たちが食べられるとは思わないわ」

それもそうです。前の提督がいた時は食堂なんて使つた記憶もありません。

そもそも艦娘に食糧補給という概念はありません。海に出て適切な運用をするだけであれば我々は資材だけで生きていくことができます。だとしてもお腹は減りますし、おいしい食べ物を食べると活力が湧いてきます。

「提督が個人的にご飯を食べるのでしよう。そう考えるのが妥当だわ」

加賀さんがもつともらしい事を言います。それもそうですね。期待するだけ絶望が大きくなります。これは今までの教訓です。

「それよりも掃除をしましょう。もし片付けができていなかったら彼になにをやらされるかわからないわ」

加賀さんの言っていることはもつともです。今はおとなしくしている提督も本性を見せていないだけかもしれません。

|| || || || ||

「提督食堂の掃除なんですと言われたことは終わりました。時間がなかったため中途半端になっているかもしれません……」

加賀さんが提督に報告をしている。

私たちが言われているのは机と椅子を並べここで食事ができるようにだ。そのため食堂の隅にはガラクタが鎮座し邪魔になっている。

「いいよこれくらいで。十分だよ。机と椅子さえあればなんとかなる。その後のことはまた後で考えればいいんだよ」

彼はそう言うともまた厨房のほうへと消えていきます。

厨房からはいい匂いが漂ってきます。

「そろそろ時間だね。みんな集まってるかな？」

提督が指示した一三〇〇に総員集合。私はそこに全員が集まっているとは思えない。何名かはいると思うがそれでも提督という人種に嫌悪感を持っている者しかいないこの鎮守府では総員集合など出来る筈がない。

「こつちの準備も出来たしそれじゃ行きますか」

|| || || || ||

かつてグラウンドであった場所は雑草が茂り青々としている。誰も使わなくなり、自然に帰ろうとするグラウンドに朝礼台だけが置かれ、そこに提督は立っている。

赤城の言ったように全員は集まっていまい。前もつてい手に入れていた情報と艦娘の人数が違う。

「皆さんこんにちは。今日付けで提督になりました。よろしく」

彼は皆さんの純度100%の憎悪を孕んだ視線を受けてもなお飄々とした態度で挨拶をします。

「堅苦しいのはやめだ」

提督そう言うのと胸から見たことのない回転式拳銃を取り出し、空に向けて5発撃ちました。

「これは僕が提督になるときに渡されたものだ。あそこの鎮守府は提督であろうと容赦なく殺意を向けてくるだろう。もしそのときはこれで艦娘を撃て。例外の鎮守府だいくらでも揉み消す。そう言って渡された。弾薬は特別製。艦娘であろうとぶつ殺せるらしい」

提督はそう言っています。皆さんの目は淀みきっています。
「残り一発、これをどうするか」

回転式拳銃であればほとんどのものが6発装填なので確かに残弾は一発になります。

「赤城、ちよつと来てくれ」

「……はい」

提督は私を呼びます。決意しました。

「ごめんね」

そう言つて提督は私に銃を向けました。後ろで加賀さんが叫んでいます。しかし呼ばれたのは私です。覚悟は出ています。せめて海の上で散りたかつたのですが贅沢でしょうか？

「じゃあ赤城。君の本心を教えてくれ」

提督は銃をおろし私に渡してきました。

「僕は軍を辞めようとしたら無理やり提督にされたんだよ。生きていても意味がないから死んでもよかったんだけどね。偉い人が許してくれなかった。提督の素質なんてあるわけがないのに。左遷という形でここに来た。軍は僕を死ぬまで使うつもりだ。君に撃ってもらえるなら潔く死ねると思うからやるときは気前よく引き金を引いてね」

「私は……」

#####

「やめてください、赤城さん!!それは違います」

私は叫ぶ。ここで引き金を引いたら駄目なんです。それはやってはいけないことです。

「御免なさい加賀さん。私はいけない娘なんです。今こうして銃を持っていると、体の底からふつつつと殺意が湧いてくるんです。仕方ないじゃないですか。私、提督をぶつ殺したいとしか思えないんです。殺せば今までの事が全部忘れられる気がしてるんです。おかしいですよね」

「違いますそんな事をして意味がないんです!!」

「違いますよ。私たちがされた事を考えれば今殺されようとしている提督は前任の代弁者として死ぬわけです。私たちの総意で死ぬ。皆さんもぶつ殺したいと思つていますよ」

「撃て。赤城」

外野が五月蠅い。

「加賀さん。私は駄目なんです。潰れそうなんです。今まで耐えてきたのに、今さら殺意を止めようとしても遅いんです。大嫌いな提督を殺せる機会が廻ってきたと考えれば願つたり叶つたりじゃあないですか？」

「赤城撃つなら撃つてくれ」

提督も五月蠅い。

「加賀さんもしここで撃たないと後悔するかもしれません。彼も前任のように酷い提督だとしたらどうしますか？また懲罰房に行きますか？私は行きたくありません」

「それでも違います。撃つてしまつたら終わりなんです。恐らく解体でしょう。人間を撃つ兵器なんて欠陥品です!!」

「それでも私は……」

#####

結局のところあの集會に意味があつたかと言われると私にはわかりません。しかし提督は生きています。

|||||

集會は私がへたり込み泣き崩れて有耶無耶になりました。提督が私を見て「白けた。今日は解散」と言つて皆さんは寮へと歸つて行きました。

「ちよつと遅いけど昼御飯があるから食べたい人は食堂まで来てね」
皆さんの去り際に提督が一言添えました。

|||||

「それじゃあ御飯でも食べようか」

誰もいなくなつたグラウンドには加賀さんと提督、そして私しかいません。

「はい。いただきます」

私は結局撃てませんでした。

「撃てなかったね赤城。死ねると思ったんだけどな」

「はい私は撃てませんでした……」

「しかたない。それは君に預けてるよ。ぶつ殺したいときはいつでも撃つていいからね」

「提督は優しいのですね」

「そんなことはない。極悪非道って軍じゃあ有名だったんだよ」

そんな筈がありません。私の目の前にいる提督はとても優しい方です。

「それよりも加賀。突っ立ってないで赤城を起こして。御飯食べに行くよ」

「え？あ、はい……」

加賀さんは困っているようです。表情が顔に出ないだけであの人は感受自体は豊かです。

「今日のメニューは白米、味噌汁、鰯の干物、卵焼き。簡単なものしかないけど怒らないでね」

提督はそう言うのと歩き始めます。

「二人とも早くして」

昼御飯を食べられるなんて本当に久しぶりです。

第四話 お姉さん。信じてみようかしら

「それじゃあいただきますか」

私と赤城さん、そして提督は手を合わせる。

先ほどのごたごたが嘘みたいです。

「加賀さん、私たち御飯が食べられるんですよ。夢みたいです」

そう言って赤城さんは目をキラキラと輝かせている。

「ほら早く食べようよ」

提督も急かさなくてもいいのに。

|||||

提督が作った御飯は大変おいしいものでした。簡単なものでしたが、今の私たちに
とっては大変なご馳走です。

赤城さんは御飯を食べながら、また涙を流しています。泣いたり食べたり忙しい人で
す。

「なんだ、赤城、泣くほどじゃないだろう」

提督は赤城さんを笑います。

「加賀さん。貴方だって泣いてるじゃないですか……」

私が？

そんなはずありません。しかし、頬に手を当てるとしつかりとした水分が手に残りま
す。

「どうして……」

不思議なものです。私は涙を流しているつもりはありません。

「加賀まで泣いてるのか」

「違います!!これは……その……」

私は提督に反論しましたが、提督は面白そうにこちらを見て笑います。

どうにも彼は苦手です。掴み所のない性格は私と反対のように感じられます。

「いいから、いいから」

そうして私たち三人は御飯を食べます。この瞬間は私の人生で一番美味しく御飯が
食べられた日だと思います。そして私たちの始まりの日だと思います。

「提督。ご馳走様でした」

私と赤城さんは御飯を食べ提督に礼を言います。

「それにしても君たち二人はよく食べるね」

「提督の作る御飯が美味しいからです。しようがないじゃないですか」

「まさか、赤城が御飯を4杯もお代わりするなんて思っていなかったけどね」

「やめて下さいよ。提督」

赤城さんは照れているみたいです。

「加賀さんだつて同じくらい食べてたじゃないですか。私だけ言われるのはちよつと不

公平ですよ」

「つ……」

赤城さんの一言で私にまで飛び火してきました。

「よく食べる事はいい事だよ。気にせず食べなさい」

提督は私たちをからかった

|| || || || || ||

「提督、洗った食器はここでよろしいでしょうか」

私たちはい昼御飯を食べ終わると荒いものをしました。

提督は僕がするから大丈夫だよと言っていましたが私たちは何か恩返しをしたかったのかもしれませんが。ここは譲れません……。そう言つて、私と赤城さんは洗物を済ませます。

「他の艦娘たちは来ないね。仕方ないといつたら仕方ないか……」

提督は眩きます。

「そうですね。あれだけの事をしたのですから、来る人はいないでしょう」

「それもそうだよなあ。結構派手にやっちゃったしねえ……」

提督は自覚しているらしい。これで自覚していないのでいたら恐らく馬鹿です。現

在進行形で馬鹿ですけども……

「結構がんばって作ったのになあ。もったいないなあ」

「大丈夫ですよ提督。余つたら私が頂きます」

「そうだね。そのときは頼むよ」

赤城さんだけに任せるわけにはいきません。私はご相伴に預らせていただきます。

「でもその必要はなさそうだね」

提督がそう言うと言つて食堂の入り口を向きます。

「入ってきなよ。なにもしないよ。拳銃なら赤城が持つてるしね」

「失礼しますね……」

すると何名かが食堂に入ってきた。

「それじゃあ御飯だ。君たち並んで。順番に持つていつて」

提督は食堂に入ってきた者を受け入れたみたいです。

|||||

「私は陸奥、長門型戦艦の2番艦の陸奥よ。よろしくね。提督」

「時雨だよ」「私は吹雪です」「不知火です」

食堂で昼御飯を食べながら一人ずつ提督に自己紹介をしています。

「一度に覚えられないと思うからゆっくり覚えていくよ。ごめんね。人の名前を覚えるのは苦手なんだ」

提督は困り顔です。

「それにしてもこれ美味しいわね。初めてよ、こんなに美味しい御飯を食べたの……」

陸奥さんが感心しています。

「ちよつと病院にいる期間があつてね。そこで色々と研究してたんですよ。料理くらい

しかやる事もなかったしね」

「司令官は軍医だったのですか!？」

「すごいわね」

吹雪さんと陸奥さんが驚いています。

「そんなじゃないんだけどなあ。僕、仕事は得意じゃないし」

軍医からの提督へ。なかなか異例の移動である。しかし当の本人は左遷と言っているため、何かをやつてここに来たというのは間違いではなさそうです。

「それより君たちは僕のことを怖くないのかい？ 前任の提督には色々と酷い事をされていたみたいだけど？」

「怖いですけど、私たち駆逐艦はあまり処罰の対象になりませんでした。前の提督は戦艦や空母、重巡洋艦といった比較的、女性らしい艦娘をよく罰していました。なので、私たちは直接何かをされたことはありません……」

それは事実です。見た目が中学生、小学生のような娘に対してはあまり手を出しませんでした。彼はクズといわれて仕方がない人間でしたが、駆逐艦に手を出さなかったことは唯一と言つていい彼の人間性のあり方でしょう。

「それでも僕たちは提督のことは怖かつたよ。あれは独裁者だ。恐怖政治だ。死んだ方が世界の為になるような人間だった。いなくなつて心の底から嬉しかつたよ」

時雨さんが先任の提督を口悪く罵る。このような言葉を使う娘ではなかったと思いますが……。

「不知火は前任の提督からはつまらないと言われ、それ以降、艦隊に配属される事も、お話をする事ありませんでした」

不知火さんのような子は、提督からすれば鬱陶しいだけの存在だったのだと思います。泣き喚くことも無く、ただ指示を待つ、忠実な部下のような性格は。彼の加虐心を揺さぶらなかつたのでしょうか。

「この話はもうやめない?。私だつて色々な思いで食堂まで来たんだから。前の提督の話は終わりにしましょう。御飯が不味くなるわ」

陸奥さんは話を無理やり終わらせませす。彼女もまた被害者だ。

「今日はこの辺で終わりにするか。悪かったね。皿は適当に置いておいてくれれば洗つとくよ」

提督は言いますが、彼が洗うことにはなりません。理由は簡単で、皆さん恩返しのように食器を片付けたからです。

#####

私は陸奥、長門型戦艦2番艦。名誉ある艦娘だと多少なりと理解しているつもり。

先ほど新たに着任した提督の挨拶があった。それはもう酷いものだったわ。

適当な言葉を並べただけの気の抜けた挨拶は今でも思い出せる。あそこまで適当な言葉を並べる軍人がいたのかと思うと少しだけ面白くなってしまった。

それにいきなり拳銃を取り出して発砲。堅苦しいのはやめつてどの口が言ってるのよ。拳銃の果てに殺して下さいといつて赤城に拳銃を渡すんですから。あれにはお姉さんも驚いちゃったわ。

あそこまで火遊びが過ぎる人間は生まれて初めて見たわ。どう考えても頭の螺子が足りてないもの。それも大量に。

それでも私は前の提督のような人間ではないと思つたわ。なにがどうであれ、人間の所業ではない事を前の提督はやっていただけけれど、今回の提督はそのような事はしないと感したわ。

だつて撃てないと思つて赤城に拳銃を渡しているんですもの。ただの自殺志願者かと思つたけれど彼は違うわ。何かを考えて赤城さんに拳銃を渡した。その考えがまったく読めていない事は問題だけれど、この鎮守府に来て、艦娘に拳銃を渡すような人間よ。先を読もうにも読めないわ。

それでも考えるとするならば、恐らく彼は信じたのでしょね。赤城を。出会つて間もない赤城を信じ、見事に生還。彼はこの短時間で艦娘の何を見たのか、私にはわから

ない。

自暴自棄でやった事かもしれないけれど、私は信じることにするわ。彼が新しい提督よ。私たちの……。

|| || || || ||

泣き崩れる一航戦を見たのは初めてだったわ。

面白いものが見れた。

それに彼はお昼御飯があると言い残した。まさかとは思ったけれど、私は信じることにしたのだ。提督についていこう。

同じ戦艦であり、私の姉である長門を誘ってみたけれど駄目だった。いきなり新しい提督を信じる馬鹿なんている筈が無い。色々とあたってみたが誰一人お昼御飯の誘いには乗ってくれなかった。

「馬鹿者は私だけか……」

仕方が無い。一人で向かおう。

「あの……。ちよつといいですか」

寮から出ようとすると吹雪に呼び止められた。

「あらあら、どうしたの？」

「これから司令官のところへ……、向かうんですよね……。出来れば私たちも連れて行ってくださいっ!!」

馬鹿者が4人に増えたわ。

「……いいけれど、貴方達は怖くないのかしら」

「怖くないないわけじゃないよ。僕は前の提督事は殺してやりたいと何度も思ったし、今も思ってる。けれどあの人は違う。新しい提督を殺したいわけじゃない。本質が違うんだよ」

時雨が怖い事を言っている。

「不知火もそうです。それに、前任の提督と比べるのは失礼が過ぎると思います」

「怖いですけど、会って、実際にお話をしてみたいとわかりません。それでも私は信じたいんです。馬鹿みたいと思われるかもしれませんが。信じてみたいんです!」

やけに熱のある駆逐艦たちね。

「もし気に入らない提督だったら僕が引き金を引いて提督の脳をぶちまけるよ。誰かがやらないといけないうら僕がやる」

時雨が怖い娘になってしまったわ……。

「じゃあ一緒に行きましょうか」

こうして私たちは提督が待つ、食堂へと足を運んだ。

食堂には今まで食べた事の無いような美味しい料理があり、ここへ来て正解だと感じた。いいじゃない。今日くらいお姉さんにだって食い意地を張らせなさい。

心に暖かさがある。気づくにはまだ早いみたい。

第五話 掃除とジャージとメイド

「皆………って言ってもここに居るのは僕を含めて7人か。それでも十分。」

提督一人で納得しているみたいですね。

「御飯を食べたらやってもらおうと思つてた事があつてね。人員が欲しいから昼御飯で釣つてみたけどうまくはいかなかつたよ」

「私たちが御飯で釣つたんですか！・酷いじゃないですか」

「君たちは美味しい御飯が食べられる。僕はそれで雑用を頼む。損をしている人間はいないよね。それにこれからやってもらふ事は君たちにとつて有益だと思ふよ」

「しかし、騙す様なやり方はどうかと思います」

加賀さんが不機嫌そうです。

「まあまあいいじゃない。それで提督、やつて欲しい事はなに？」

陸奥さんは切り替えが早いです。

「まずは掃除だな。午前中に色々と回つたけど汚すぎる。使われていない施設が多いといつても限度がある。今日はちよつとした掃除をしてもらいたい」

掃除ですか。

「駆逐艦たちには、食堂を綺麗にして欲しい。さつき途中まではやったんだけどね。時間と人手が無くて中途半端に終わったんだ」

座つて食事が出来る程度には片付いているものの、小汚さは否めません。

「そして空母と戦艦組は船渠を掃除してもらいたい」

「すいません提督。船渠を掃除するのですか？今のままでも十分に使用できると思うのですが？」

「使用できると、使用したくないは別物だよ。とにかく黴が生えていたり、水が濁つたりしていてそれはもう汚くしてしょうがない。今まで問題が無かつたとしても精神衛生的によろしくないんだ」

私は一応、理解はしました。しかし、体に傷を負つた時にしか船渠は使用しないため、傷が癒えるのであれば、それで十分だと思います。

「私はお風呂を掃除するのには賛成よ。だつて綺麗なほうが気持ちがいいんですもの」
「陸奥はわかつてるね。とりあえず赤城、綺麗に越したことは無い。出来る事をやっていこう」

提督はそう言うとそのくさと準備を始めました。

「赤城さん。今は提督の言われた事をやりましょう」

加賀さんの言う様に、今は黙つて提督に従いましょう。

|| || || || ||

「道具はこれね。皆で頑張つて終わらせよう」

提督は今日搬入された物資に掃除用具一式と何故かとても田舎っぽいジャージを取り出してきた。

「これに着替えて。汚れちゃうでしょ。こんなこともあろうかとジャージを持ってきてたんだ」

妙に準備がいいです。

「赤城と加賀の分ね。陸奥のやつはこれ」

私と加賀さんに渡されたのは上下長袖の一航戦カラーのジャージだった。どうして赤と青のジャージが入っていたのか？気にはいけないようです。

「私はこれね」

陸奥さんは半袖のシャツに青色のハーフパンツ。

「赤城と加賀はなんとなくイメージカラーっぽいやつだね。陸奥のは僕の趣味だよ」

「あらあら」

イメージカラーはなんとなくわかります。しかし陸奥さんのは何ですか。それに提

督の趣味だとか。

「綺麗なお姉さんがジャージを着てると、僕の存在しなかった青春を想起させるんだよ」
「聞いても無いのに答えないで下さい!!」

提督を少しだけ優しい人だと思っていましたがちよつとだけ評価が落ちました。

「ねえ提督、お姉さんと遊んじゃう?」

「陸奥さん!!。話を面倒な方向に持つていけないで下さい!!」

無かつた思い出を作り出さないで下さい。

「それよりも早速掃除だ。てきぱきと動いて終わらせちやおう」

提督はそう言つて食堂を、出て行きます。あの人は人の気持ちができるのかどうか怪しいです。

|| || || || ||

「加賀、もつと腰を入れて磨くんだよ」

提督が加賀さんにデッキブラシの使い方を指導しています。

「ちよつとよくわかりません・・・」

それは仕方が無いことです。今まで海域で戦闘人形のように任務のみをやっていた

私たちがいきなりそう掃除をしているのです。慣れているはずがありません

「加賀つて意外と不器用なんだな。赤城はそこそこ様になつてゐるみたいだよ」

「ありがとうございます提督。しかし私もこのような掃除をするのは初めてなもので……」

加賀さんがちよつと不貞腐れた顔をしています。あの人は感情が顔に出ないだけで、意外と感情は豊かです。

「加賀も頑張つてね。応援してるわよ」

陸奥さんは妙に慣れた手つきで床のタイルを磨いていきます。

「赤城と加賀はそれが終わつたら脱衣所の掃除を頼む。陸奥は僕と一緒に黴落としをしよう」

「わかりました提督」

船渠は広いため、手分けをして掃除をします。今日中に終わるか心配です。

「司令官！食堂の掃除が終わりました。他に私たちに手伝える事つてありますか？」

吹雪さん達が食堂の掃除を終えこちらやつてきました。

「そうだな、君たちは窓拭きでもしてもらおうかな？これだけ人がいればすぐに掃除は終わると思うし。」

「わかりました指令官」

「それと脱衣所においてあるのが君たちのジャージ。汚れちゃうから着替えておいで」

「いいのでしょうか司令」

「いいよ。いいよ。ジャージくらい好きに着なさい。」

「ありがとうございます」

不知火さんが遠慮がちに聞いていますが、その後納得した顔で着替えに行きました。

＝＝＝＝＝＝

吹雪さん達の手伝いもあり、何とか一七〇〇には掃除が終わりました

「提督、どうして僕だけメイド服なのかな？」

先程から気になっては今したが誰も聞かなかった事です。

「これも僕の趣味。時雨ってメイド服に合いそうだからね、持ってきたんだよ。サイズも丁度だろうか？」

「いい趣味してるよ提督」

時雨さんは特に気にしていなさそうです。

「本当は加賀にも着せたかったんだけど、後が怖いからまた今度ね」

「なっ……!!」

加賀さんが顔を赤くしています。これは私がメイド服を着るんですか？ 似合いませんよ。それに恥ずかしいです。と思っている顔だ。

「着たいときはいつでもいいからね？」

「恐らくその日は来ないと思います」

加賀さんは拒否していますが気になっていきますね。アレ。

「きつと似合うと思いますよ」

「冷やかさないで下さい」

怒られてしまいました。

「風呂掃除も終わったことだし、次の仕事だ。赤城以外はまた執務室に適当に物資を運んでいてくれ。今回は全部よろしく。重たい荷物は加賀や陸奥に任せていいぞ」

「私、重いものを持ちたくないんだけど」

「頼むよ陸奥、君しかないんだよ」

「あらあら。お姉さん頑張っちゃうわ」

陸奥さん。ちよつと簡単すぎやしませんか？

「あと、加賀。一九〇〇に食堂に集まるようにと伝令を頼む」

「わかりました提督」

また提督が指示を出し私たちが従います。それにしても、私だけここに残されるのは
いつたいたいどうしてでしょう？

#####

ひたすらにダンボールを運びます。力仕事はあまり得意ではありませんが駆逐艦の
子たちが頑張っている手前、私が休むわけにはいきません。

「そろそろ時間じゃない？」

陸奥さんが私に言います。そろそろ提督の言っていた時刻です。

「こっちはそれなりに終わったことだし、食堂へ行きましょう」

そうですね。吹雪さん達が戻ってきたら一緒に食堂へ向かいましょう。

「私、楽しみだわ」

陸奥さんはなにやら楽しそうな顔をしています。

|||||||

「とてもいい匂いがします」

食堂に來た私たちはドアを開けると今まで嗅いだ事の無い、食欲をそそる香りに惑わされました。

「おー來たか。今日の晩御飯だよ。いちいち品数を増やすのは面倒だったからカレーにしたんだよ。海軍と言ったらカレーだし、丁度いいと思つてね」

「いいじゃないカレー。とつてもおいしそうよ」

「肉じゃがとか定番っぽいやつを作ろうとして、ちよつと面倒になつてな。まとめて作るならカレーが一番樂に作れたんだよ」

「私たちは何でもかまいません」

そうです。御飯が食べられるのであれば、私はこれ以上のことはありません。これ以上の無い事を提督はやってくれているので、さらに何かを求めるのは強欲が過ぎるといえます。

「指令官、また私たちも食べていいんですか」

「いのかい提督？」

「ああ、いいよ。お代わりもあるからたくさん食べてね」

「ありがとうございます!!!」

皆さん嬉しそうです。

「他の艦娘達にも晩御飯の事は伝えただけど、來ないね」

食堂に集合とはこのことでしたか。

「まあいいか。それじゃ、みんな食べようか」

「わかりました」

皆が手を合わせてカラーを頂きます。

「加賀さん？この人参とジャガイモ、私が切ったんですよ？」

赤城さんが残っていた理由は料理の手伝いでしたか。

「赤城、料理なんてできるの？」

陸奥さんが私たちの疑問を代弁してくれます。

「料理と言っても人参やジャガイモを切るだけです。技術なんていません。難しい

ことではないですよ。誰でも出来ると思います」

なるほど。それなら私でも手伝えそうです

「意外と楽しかったので、またお手伝いする機会があればお願いします。提督」

「それいいわね。私にも教えて欲しいわ」

「私にもお願いします」

私たちは、少しでも提督の力になりたいのです。皆が料理できるようになれば、提督の負担を減らせるかもしれません。

「そのときが来たら手伝ってもらおうよ、もちろん皆にね」

ありがとうございます。

今日の晩御飯は今まで食べた中で一番暖かいモノになりました。

#####

皆が御飯を食べ終え、皆で片づけをする。

「提督、食器は全部洗ったよ。次は何をすればいい?」

「そうだな。それなら皆を集めてくれよ時雨」

「わかったよ提督」

皆がって提督の下へ集まります。

「よし集まったな。今後の予定を言っておこう。当分艦娘らしい仕事はなし。休み。鎮守府の復興が先。そして今日は解散。明日は朝九時に食堂に集合。そんじや解散」

「仕事をしないってどういうことですか!?!。もし深海棲艦が現れたらどうするのですか?」

加賀さんが言っていることは間違っていない。

「それなら大丈夫。ここに来ていない艦娘たちが自主的にやっているでしょ? 哨戒任務。特に川内型? その他も色々手伝ってやっているじゃん?」

「それはそうですが……」

「それで今まで大丈夫だったんだから大丈夫。なんとかなるさ。自主的にやっているならこれ以上文句は言わないよ。あくまで、彼女たちは僕に従わないみたいだから、何もいえないしね」

「それでも!」

「まって、まって」

「提督にも考えがあるんでしょ?」

陸奥さんが言います。

「なんでもいいさ。今日着任したばかりの提督に人望なんてあるわけない。ゆっくりと時間をかけて取り組む問題は山程ある」

「そこまで言うなら信じます。もし私たちが納得の出来る理由をお持ちでなかったら、その時は話を聞いてください。」

「そのときはそのときで」

提督は適当な返事をします。

「それでは、各自解散。また会おう」

僕たちの新しい提督は。鎮守府での一日を終えた。

第六話 一航戦と女の感

「朝です。提督、起きて下さい」

赤城です。昨日提督にお願いされたのでここへ来ました。朝の6時に起こしてくれ。恐らく僕は寝起きがとても悪いから起きるまでは根気強く頼むと。

提督は執務室に自前で持つてきていた畳二畳の上、布団を敷き寝ていました。おおよそ艦隊の指揮を執る人間が寝ているとは思いません。

「提督!!」

まったくもってお起きる気配がありません。しかし提督はどのような事をしていてもいから起こす様にと言っていました。強硬手段に移るとします。

「提督、起きないのでしたら此方にも考えがあります。ご容赦を」

私は誰も返事をする者が居ない部屋で一人言葉を発します。覚悟のようなものです。

「それでは行きます!!」

手始めに提督の掛け布団を剥ぎ取ります。次は枕を強引に頭の下から抜き取ります。鈍い音がしましたが、提督はまだ起きません。

「まだ起きませんか……」

次は提督を乗せた布団を少しづつ引つ張つていき、敷布団を奪います。畳の上に寝転ぶ提督は未だに大の字で寝ています。これでも起きないのはなかなかかなものです。

しかし、こうなつては最終手段に移るしかありません。

「一航戦赤城、行きます！」

私は提督の枕元に座り、体を揺すり続ける作戦に出ます。起きるまで揺らし続けま

す。起きるまでは続けるつもりです。忍耐勝負です。

「……………」

わずかですが提督の反応があります。この調子ならすぐに起きそうです。最初からこの作戦で行けばよかったです。

「もう！提督、朝なんですから起きてください」

「……………赤城か？」

返事をしたのでこの勝負、私の勝ちになりそうです。

「すまん赤城。俺は寝る。また今度な」

提督は言葉を発しました、また眠つてしまいました。ちよつと提督！私の膝は枕にはなりません。それと起きて！！

提督は私の膝に頭を乗せ、腰に腕を回し、しがみ付いてきます。ここまですてくるとは思いませんでした。私も逃げるわけには行きません。体ではなく頭を揺らしていき

ます。

「……………」

「提督!!早く起きて」

「……………」

「……………」

「……………」

「赤城さん?」

不意に後ろから声を掛けられました。私のよく知っている、もう一人の一航戦。

「……………え?」

#####

加賀です。赤城さんが、朝早くから身支度をし部屋から出て行くのを発見しました。このような時間からいつたいなにをするのでしょうか。少しの出来心と残りの好奇心で、後を追ってみることにします。

赤城さんは真面目な方なので、やましいことは無いと思いますが……………。

|| || || || ||

どうやら執務室に用があるみたいですよ。

恐らく提督に朝早く来るように言われたのだと思います。赤城さんに雑用を押しつけるのはかまいませんが、私たちをもっと頼つてもいいと思います。

ここは一つ、提督に直接用件を聞き、私たちにも手伝える事がある聞いて見ましょう。

|| || || || ||

「どの辺りから見えていましたか？」

「提督が膝枕をしているあたりですね」

「なるほど」

執務室の扉を開けると赤城さんの膝の上で提督が寝ています。しっかりと腰に手を回して。

私たちが居ない間にずいぶんと仲良くなりましたね。それとも提督の命令なのでしょうか？疑問は残りますが、提督の趣味を考えれば無理やりやらされているとも考えられます。

「加賀さん！聞いてください。提督がなかなか起きないんです」

提督を膝の上に乗せ、頭まで撫でている。完全にお互いの了承済みです。

「赤城さん、状況はわかりませんが退いてください。朝から人前で、そのような振る舞いは避けて頂きたいです」

「理由は後から話しますから。見ているなら加賀さんも少しは手伝ってください」

「……そう」

わけもわからず赤城さんに呼ばれたので、提督の傍に駆け寄ります。赤城さんに押し切られたわけではありません。

「体を揺すってください。目が覚めるまで揺らし続けるんです！一航戦、いきますよ」

「よくわかりませんが鎧袖一触です」

二人で提督の体を揺らしますが起きません。

「加賀さん。こうなったら自棄です。提督を引き離します」

「そうしましょう」

提督の腰辺りで膝立ちになり両脇から体を引つ張ります。赤城さんの腰から腕を放すためです。

「加賀さん。もつと力を入れて引つ張ってください!!」

「任せてください」

提督はしぶといです。頭にきます。赤城さんの状況がどうあれ、やることは一つです。

「加賀さん、せーのっ！でお願いします」

「はい」

「それではお願いします。せーのっ！」

「貴女たち。朝からなにをやっているの」

陸奥さんです。

#####

特にやる事も無く、早くに就寝した私が早起きをするのは自然な事。やる事も無く窓から外を見ると加賀が執務室へと向かっている。

提督に呼ばれたのであれば、恐ら頼まれているのでしよう。私に言ってくれてもいいのにと思ってたけれど、そこはどうでもいいわ。

私の女の感からして面白い事が起きると思うのよ。直感を頼りに加賀の後を追うことにするわ。

「あらあら………」

|| || || || ||

執務室の扉を開けると朝から見たくも無いような桃色な光景が広がっていたわ。女性の感が当たった見たいね？

膝枕をして提督を撫でていた赤城。馬乗りになって、提督の後ろから抱きつく加賀。ハレンチ一航戦がいたわ。

「陸奥さんこれは違うんです。提督を起こすためにしているんです」

「頭を撫でる必要は無いんじゃないかしら？」

「違うんで！揺らしているんです。それでも起きないんです！」

「赤城さんの言っている通りです」

「加賀、せめて座ってからにして」

「ここは桃色第一航空戦隊の集会場に成ったのかしら？火遊びが過ぎるわね。」

「説明は後です。陸奥さん、提督をどうにかして起こします。手伝ってください!!」

「事情は分かりかねるけど、何とかして見せるわ」

「どうやら提督を起こせばいいみたい。赤城からなにをしてもいいと言われているので強引にやっちゃうわ。」

「そんなの簡単よ」

私は加賀を退け、提督の両足を掴みます。

「長門にしたら怒られちゃったけど、提督は大丈夫よね」

そのまま勢いよく引つ張り執務室の外へと引きずり出します。

「陸奥さんやめて下さい。提督が離れません」

赤城が何かを言っているようだがかまうもんですか。無理やりやればいいのよ。

赤城共々執務室の外へ引きずり出す。皆生温いのよ。起きないなら起きるまで体全体を動かしてやる。そうすれば殆どの生き物は起きると思うわ。

「おはよう提督。顔を洗って着替えなさい」

ほら簡単でしょ？

赤城と加賀がこつちを見て何かを言っているみたいだけど、知ったこつちや無いわね。

最初からこうすればよかったのよ。

#####

色々とありましたが。提督を起こす事に成功しました。私一人の力ではありませんが……。

「なるほどそれでああなつていたわけ？」

加賀さんと陸奥さんに事情を説明して、誤解は解けましたが、陸奥さんはあらあらと笑っています。なんですか、もう！

「よし目が覚めた。皆ありがとうございます」

身支度が終わった提督が帰ってきました。

「僕、朝はこんな感じだから、これからも出来るかがきり助けて欲しい」
「毎回アレなのは骨が折れますね」

「朝は苦手なんだよ」

「ごめんって」

いいでしょう。昨日から提督には感謝しかありません。この程度、私が何とかして見せます。

「次から当番を決めれば？」

陸奥さんの一言です。

「それがいいかもね。自分の事だけど」

この一言で、毎日提督を起こす仕事が増えました。

||
||
||
||
||

後日、不知火さんに膝枕をされ、メイド服の時雨さんに踏まれている状況に出会いました。それは次の機会に……。

第七話 頑張る一航戦と説得

「(ズ)馳走様です」

時刻は一〇〇〇前、一航戦の出番は終わりですかね……。

提督が朝早くから起きる必要が御飯を作るためでした。しかし、予想以上に提督が起きなかつた事はまた別の話です。

最初、提督は赤城さんだけに手伝ってもらう予定だったらしいのですが、私や、陸奥さんが提督のところへ集合してしまい、結局は4人で朝ごはんを作る事になりました。

「指令官。今日の予定は何ですか？」

「いい質問だよ。吹雪君」

「はい！ありがとうございます!!」

「今日の予定を発表するね。まずは駆逐艦達、グラウンドの草筆りだ」

草筆りですか。大変そうですね。

「駆逐艦だけでは大変そうだからついでに加賀もよろしく」

えっ!?

「かしこまりました！指令官」

「あらあら。大変そうね」

「提督。私が草筆りですか？」

「人数が多いほうが片付けるのも早いでしょ。期待してるよ」

期待されているのは嬉しいですが草を筆るんですよ。一航戦が。今までの任務でも、このような事はありませんでした。

「そんじや赤城は執務室で、僕の代わりに書類整理。僕の意見が必要なもの意外は独断で処理をしてもいいよ。勿論責任は僕が持つけど、それなりに真面目にやってね。」

「私がやるのですか？大丈夫ですか？」

「なんとかなるさ。はいこれ。提督の帽子を被らせておけば、臨時提督の出来上がり。」

一応、仕事のメモは残しておくからそれに従えば大丈夫だよ」

提督はそう言つて被つていた帽子を赤城さんに被せます。本当にいいのでしょうか？それなりの地位にいなければ被る事も許されないものですけど……。

「後は陸奥。ちよつとやりたい事があるから一緒に来て欲しい」

「わかつたわ。提督」

「昼御飯は一二〇〇。また食堂に集合で」

そう言つて提督は陸奥さんと出て行きました。

「僕たちもグラウンドへ行こうか」

「そうですね」

駆逐艦達も外へ行きます。

「加賀さん、私が書類整理をしてもいいのでしょうか」

「確実に私たちがやってはいけないものだと思いますが、しかし、やったところで咎める人間は此処にはいないでしょう。ばれなければ……」

「はぁ……、気が重いです」

赤城さん臨時提督頑張ってください。

#####

「私に手伝って欲しい事ってなに？」

私を名指しで指名してるのならば、私にしか出来ない事なんだと思う。

「姉妹艦。長門だよ。いるんでしょこの鎮守府に」

長門型戦艦のネームシップ、そして私の姉。世界のビッグ7。

「やめておいた方がいいわ。長門に会うのは……」

長門は前任の提督に手痛い仕打ちを受けている。筆舌に尽くし難い。どう考えても今彼女に会うのは得策ではない。

「わかつてるよ。それでも彼女には会わなければいけないと思うんだよ。」

「それでも長門には今会わなければいけないんだ」

提督は考えを変えない。

「そこまで言うなら行きましょう。それでいいわね」

私は提督を連れて、私たちの部屋がある場所へと歩く。部屋と言ってもボロボロの木造建築。どう考えても、物置としか考えられない場所。

屋根があるだけで十分、そう思っていたけれど改めてみると酷いものだわ。

|| || || || ||

「提督はそこで待っていて、長門を連れて来るから。」

私は提督を寮の応接室に通す。応接室と言っても、今にも折れそうな足を生やした机に木箱を並べただけの、椅子と机と言うには余りにも粗末な物体。

「此処も改築しなきゃだね．．．．．」

提督が言葉を漏らす私が私には聞こえない

私は長門のいるはずの部屋へ行く。

今、提督と長門を引き合わせても確な結果にはならないでしょう。未来なんて見えな

いけれど今回ばかりは結果がわかるわ。

|||||

「君が長門だね？」

「そうだ。長門型戦艦一番艦、長門だ」

思ったよりも長門を此処へ連れて来るのは簡単だった。提督が呼んでいると言つたら、特に拒否する事も無くすぐに腰を上げてくれた。

「単刀直入にわかりやすく言うけれど、僕の指揮の下で鎮守府で動いて欲しい」

「用件はそれだけか？」

「それだけ」

「ならば無理だな。私はお前を信用できない。昨日来たばかりの正体不明な人間に従えといわれてもな……」

「それもそうだよね」

提督と長門、このままでは平行線だ。

「僕から提供できるものなら出来る限りの事はやるつもりだけど？」

「なら今すぐに此処から出て行ってもらいたい」

「それはちよつとね……偉い人に怒られちゃうよ」

「それなら無理だな。私を説得するのは時間の無駄だ。お前も自分の職務に戻ったほうが有意義だぞ」

「説得も無駄か」

長門の考えもわかる。それでもこの提督ならば変えてくれると思っていた。

「今日のところは帰るよ。それとこれ」

「なんだ？」

提督は胸ポケットから封筒を取り出し、長門に渡す。

「今日の二一〇〇くらいに中身を見て欲しい。そこに理由は書いてある。君はこの手紙を見て必ず行動を起こす」

「よくわからんがこれは受け取る。しかし行動を決定するのは私だ。それでは失礼する」

長門は立ち上がり、自室へと帰っていく。私は提督が渡した封筒の中身を知らない。

「いいの、提督？」

「今回が駄目でも次がる。気長にやろう」

提督も立ち上がり、部屋を出る。

「草率り戦隊の様子でも見に行こうか？」

私に笑いながら声を掛ける。5月の風が心地よかった。

#####

「やってるかー」

提督の気の抜けた声が聞こえてきます。

「指令官、意外と雑草を抜くのは難しいですね」

「そうかー。ちゃんと根っこまで引き抜くんだけ。そうしないとまた生えてくるんだよ」

「こうでしようか、指令?」

「不知火はセンスがいいな。よく出来てる」

「ありがとうございます。指令」

提督が不知火さんを褒めています。

「加賀、似合ってるわよ。そのジャージ」

「ジャージ一航戦。様になってるよ」

私だってジャージが似合う一航戦にはなりたくありません。

「今週中に終わればいいかな。それまでは第一農耕戦隊として頑張ってくれ」

農耕戦隊つて………。私たちはもともと海で戦う艦娘です。それが陸で雑草の処理など……。

「引き続き頼むよ」

提督は、また何処かへ歩き始めました。

#####

「提督助けてください。書類仕事が終わらないんです」

「ゆっくりでいいからな。確実にやれば大丈夫だよ」

提督に泣き付いたものの返事は私の想像していたものではありませんでした。

私は執務室で、本来提督のやるべき仕事である、大本営からの資料整理をやっています。まさか司令部も、艦娘が提督の代わりに仕事をしているとは思わないでしょう。

「赤城、これとこれ以外の資料は僕の印鑑を押しなさいよ」

提督は私が分類していた、提督のサインが必要なものに目を通し、また私に仕事を押し付けてきます。本当にこれで大丈夫なのでしょうか？

「責任は持つよだから赤城が頑張ってくれればいいんだよ」

「そういわれましても……」

「赤城、頑張つてね。提督っぼい貴女も素敵よ」

「陸奥さんもからかわないで下さいよ」

「そうだ。ついでにこの上着も着てみなよ。提督らしくていいんじゃないかな？」

提督が私に上着を羽織らせます。提督までふざけないでください。私が着るべきものではありませんし、サイズが大きすぎます。

「最近暑くなってきたから丁度いいや。階級章を含めて僕には重すぎるし、暑苦しいと思つてたんだよ」

「提督は真面目ではありませんね」

「真面目にするべき事以外は適当でいいかなと思つている性分で」

陸奥さんが隣でくすくすと笑っています。他人事だと思つていきますね。

「色々大変そうだけど、ここで朗報。昼飯の時間だ」

時計を見ると、時刻は一二〇〇前、知らないうちに時間は過ぎていくみたいです。

「いったん休憩。食堂へ行こう」

私たちは食堂へ向かう事にします。

提督の帽子を被り、上着を羽織つた私をみて、加賀さんが見た事もない顔をしていました。ちよつと面白かったです。

#####

昼御飯を食べ終わると、提督は私たちに指示を出す。

「陸奥、次は川内型に会いたいんだけど……」

「川内達に？」

「彼女達は恐らくだけど、僕に協力的だと思うんだよね」

「どうして？」

「勘だよ。赤城が僕を撃たなかったみたいなものだよ。信じてる」

提督の根拠の無い自信はどこから来るのか。私にはわからない。

「案内よろしくね」

「わかったわ提督」

|||||

川内姉妹が暮らしているのは、長門がいたような寮ではなくテントだ。鎮守府の敷地の隅。巨大なテントを張り、そこで暮らしている。理由を聞いてみたら前の提督が触つたものに触れたくない。あの人が用意したものを使いたくない、そんな理由だったと思

う。

「提督ですか」

私たちはブルーシートの上に通された。座布団を敷き、小さな卓袱台をおいただけ異質な空間だ。

「何も無いですけど」

そう言うのと神通は提督と私に湯飲みを運んできた。中身は水だった。

「ありがとう神通……でいいのかな？」

「そうです。川内型の神通です」

「今、君一人だけ？」

「川内姉さんは寝ています。那珂ちゃんは哨戒任務に出ています」

「君たちが近くの海域を哨戒してくれているお陰で今のところは、深海棲艦の目立った動きは無い。感謝しているよ」

「私たちはやるべき事をしているまでです」

「それで、相談なんだけどね、僕の指揮の下で動いてくれないか？」

「私は別にそれでも構いません。しかし、川内姉さんや、那珂ちゃんの意見も聞かなければなりません」

「なるほど。それならば那珂は何時帰ってくるんだ？」

「もう少しで帰ってくると思います。そろそろ交代の時間なので」

「それまで待つていてもいいかな？」

「構いません。ゆっくりしてください」

提督是那珂が帰ってくるまで此処で待つつもりらしい。青いパッケージの煙草を取り出し火をつける。

|| || || || ||

「那珂ちゃんが帰ってきたよ」

元気な声が聞こえてくる。

「お帰りなさい、那珂ちゃん」

「あれ？提督どうしたの？」

「ちよつと君たちに話があつてね」

「それで此処まで？」

「神通にはもう話した。そうしたら、三人に意見を聞いてくれと言われたんで待つていたんだ」

「なるほどー。それでお話は何ですか？」

提督は先ほどの話を繰り返す。

|||||

「私は別に構いません」

「ありがとうございます」

思つた以上に簡単にいきそうだわ。

「ただし条件があります。私たちが続けている哨戒任務はこれかもやらせて下さい。それと、艦娘達の言う事に耳を傾けてください。決して話半分ではなく真面目に、真摯に受けてとめて下さい」

神通がしっかりとした口調で提督と交渉する。

「願つたり叶つたりだよ。このまま哨戒を続けてもらいたかつたんだよ。二つ目の事、君たちの人権についても保証するよ。ちゃんと同じ目線で話しをしよう」

「どうやら提督と川内姉妹の次女と三女は私たちと一緒に動いてくれるらしい。ありがたいわ。」

「後は川内だけか」

「川内姉さんはこの時間は動きません。夜の哨戒のために寝ていますし……。」

「わかったよ川内とは今度、それと君たちが少しだけ話してね」

「わっかりました、提督」

「それと食堂に夕食を用意しているから何時でも顔を出していいよ。君たちの分も勿論用意してある」

提督はそう言うのと席を立つ。神通たちは首を傾げていたが、礼をして、提督を見送る。今日から食堂に人が増えると思うわ。

第八話 長門と川内

「提督ありがとうございます」

神通さんがお辞儀をして感謝を述べています。

「那珂ちゃん。こんなに美味しい御飯を食べたのは初めてだよ!!」

「そうでしょ提督の料理は結構凄いだから」

陸奥さんの言うように提督の料理は大変美味しいです。

「それにしても結構増えたな。食堂も狭くなりそうだよ」

少しずつではあるけれど、提督に従う艦娘も増えてきた。

「それじゃ各自解散。明日も定刻通りに此処へ集合」

時刻は二〇〇〇。私は赤城さんと少しお話がありますので。

|| || || || ||

工廠の裏手にある誰にも使われていない空き地。提督が此処へ来るように手紙に書いていた。人目は存在しない。

「来てくれたか長門」

「ああ」

「長門ならアレを見たら来てくれると思っていたよ」

「そこまで信用してくれてありがとう。ただ意図が見えない」

提督に渡された封筒には何枚かの書類が入っていた。一つは前の提督の死ぬまでの情報だった。

「どうしてアレを提督が持っている？」

「それは簡単だよ。現場にいたんだよ」

提督に渡された書類は前任の提督の尋問内容だった。

「軍法会議の前に、国家機密をどこまで蔑ろにしてきたか？此処まで鎮守府を滅茶苦茶にしてくれたんだ。尋問したつて問題は無い。偉い人からの要望もあつてね。メンツを気にしてる人からしたら、国の税金を使って虐待をしているなんてばれたくないんでしょ。早期発見。早期隠滅。得意分野だ。尋問と言っても非公式な死刑だ。一応自決扱いで二階級特進。これだけしたのに僕よりも階級が上だよ。嫌になっちゃうねよ」

「私が聞きたいのはそんなものではない！」

「じゃあなんだい？」

提督は全てを知っている。それなのにまともに答えてくれない。私の体温が上がっていくのがわかる。

「お前のような男が提督になっている事が問題なんだ!!」

問題は提督の来歴だ。こんな人間が艦隊を率いるなどあってはならない。

「僕はね、助けたいんだよ。自分自身を。エゴだけだ。誰かに救いの手を差し伸べて救いたい。いいと思うんだけど。駄目かな?」

「私が許さない」

自分のエゴだけで提督の真似事をしているのか? 私たちを救いたい? アレだけ人間を殺しておいてどの口が言っているんだ?

「僕がこの鎮守府に来た理由もわかるだろう。飼い殺しだよ。一応、軍の機密を扱っていたわけだしね。辞めたいですと言って、民間に移れるわけが無い。それに此処なら死んでも言いと思ったのは本当だ。けれど、赤城が撃たなかった時点で僕の運命は変わった。だったら誰かを救ってみようと思った。司令部が思い描いたシナリオになるのは癪に障ったけど仕方が無い」

「まるで私達艦娘を使って正義のヒーローになりたいみたいだな」

「正義のヒーローがこんな人間に務まるわけが無い。どう考えても殺しすぎた」

提督と話すといライイラが止まらない。こんな矛盾した人間がいてたまるか。自制心が今にも途切れて体が動き出しそうだ。

「君達がされてきた事は全て前の提督から聞かせてもらった。辛い思いをさせてしまっ

てすまない。これは本心だ。国の為に戦つてくれていた君達に酷い仕打ちをしたのは謝つても意味が無い。けれど今の僕には謝る事しか出来ない」

「……………」

「それでも変えることが出来るのなら変えてみたい。違う世界を見せてやりたい」

「……………」

「可笑しい事を言っているのもわかる」

「……………」

「だけど君達の力になりたい」

「この狂った脳みそから発せられる声はどうにも私を感情的にさせる。」

「許してもらおうとか思つてもいけない」

「……………」。なあ提督。正義とは何だ。意識がある状態で指を切り落とされる事か？」

「それは違う」

「自分の体がバラバラにされて適当に繋げられた事はあるか」

「金槌が骨を砕く音、鋸で骨を切断する音。手足が目の前のミキサ―で肉塊になる。全

部経験した事はあるか？」

「……………」ない」

「射撃練習で蜂の巣にされた事も、焼き鰻をされた事も無いだろう？」

今までされた事をつらつらと言ってしまう。これを口にするだけで体から気持ち悪さがこみ上げてくる。

「私は正義のために耐えてきた。私だけならいいんだ。駆逐艦や軽巡の子達。他の皆に被害が無ければな。だから耐えてきた。酷いだろう。バケツを使えば傷は治ると言うからな。艦娘なら傷は大丈夫だ。それでも心が磨耗していく。損耗していく」

「私が耐えればいいだけの話だ。そうすれば皆には被害は出ない。だがな、体がどんな状態になっても艦娘は修復できる事が出来る。でも心は壊れていく。次第に感情が濁っていったんだ。提督という職業が正義なのか？帝国の為に私の体は必要なのか？答えてくれ！」

「必要だ」

「どうして断言できる！私がいなければ陸奥が、赤城や加賀が。何でもいいんだろう。どんなに傷をつけても回復する、都合のいい体が必要なだけだ」

「お前もそうだ。私じゃない。便利な艦娘が必要なだけだ！」

「それは違う」

「なら提督はどうしたい？。私達を好き勝手に弄んだ！その責任をどう取る？お前が出る事があるなら言ってみろ!!」

なあ提督。私が無理な話をしているのを理解してくれ。私は誰も傷つけない。

「何だつてする。今以上の生活を保障する。絶対に艦娘達に手を出す事もない。言葉では簡単に言えるけれど、君が望むなら何でも差し出すよ」

「なら私がここで腕を切り落として文句は無いんだな？」

「長門、君が本当にそれを望むのならば……」

私は提督の言葉を聴いた瞬間に飛び出していった。提督の顔を力任せに殴りつける。受身も取らずに提督に馬乗りになりもう一撃を叩きつける。

「私は冷静でありたかった。それでも、お前がこんな人間だったとは思わなかった。書類に書いてあった人間よりも目の前にいる人間のほうがさらにたちの悪いクズだ。こんなのは私が許せない」

「どのように思ってくれても構わない。長門が僕を殴って心が晴れるなら存分に殴ってくれていい。どうせならここで今までの鬱憤を全て晴らしても構わない。いつそ殴り殺すか？」

「出来るのならば私は人を殴りたくない。心を乱すお前が嫌いだ。どうにかなってしまいたいそうだ」

「もう遅いよ。殴ってからじゃね」

「そんな軽口を叩けるのならもう一発くれてやろうか？」

「それでも構わない。僕を信じてくれるのなら」

また殴る。提督の顔は鼻血で赤色に染まっている。

「僕はそこまで鍛えてないから馬乗りはやめて欲しい。ちょっとだけ重いんだ……」
まだ減らず口を叩けるのなら問題は無い。さらに右手を上げる。

「私はお前が嫌いだ。何も考えてない顔が嫌いだ。嘘っぽい口調が嫌いだ。何もかもが嫌いだ。私も無関係な人間を個人の感情でいためたつけたくは無い」

こんな弱い人間を殴ったところでなんの武勲にもならない。弱いものを虐めているだけだ。

「私は自分が嫌いだ。こんなにも感情に左右される、欠陥しかない心が嫌いだ。心のどこかでお前を助けてやりたいと思っている、自分が嫌いだ。殺すに殺せない。情に左右される欠陥兵器である私は私が嫌いだ」

「長門のそんな人間扱い振る舞いは結構好きだよ」

また提督を殴りつける。五月蠅いんだ。

「だからその感情を恥じる事は無いんだ」

鈍い音が聞こえる。

「だけど信じてくれ。君達を変えてみせる」

もう一度拳を叩きつける。

「僕と一緒に歩いてくれないか？」

何度殴りつけても彼は言葉を並べる。

「僕は口下手だからありふれた事しか言えないけれど、長門……」
いい加減に黙って欲しい。

「だから少しだけいい。力を貸してくれ……」
私は……。

「そこまで!!」

「お前は!?!」

「川内、参上!」

「川内!?!」

「長門、そこまでだよ。その人。提督はもう気を失ってる。意味が無い」

「川内。どうしてここがわかった? どうして私の邪魔をする?」

「今日起きたときに神通や那珂から色々聞いたんだ。だからちよつと前から提督の後をつけてきた」

なる程。最初から後を追ってきたのならここがわかるのも納得だ。

「長門、貴女がやっている事は前の提督がやっている事と同じだよ。どう考えてもまともじゃない。前の提督もまともじゃないけど、今の貴女はそれと同じ事をしている。まともじゃないよ」

「川内、余計な事を言うな！」

「それでも聞いて欲しい。自分のためだけにその腕を上げたのはあなたでしょ？ 誰かのための暴力じゃなくて、自分のための暴力。そんなのは正義じゃない。ましてや悪人じゃない人が使う暴力はもつと醜い。」

「じゃあ何なんだ!!」

「長門も気付いているんでしょ？ 提督は前の提督とは違うし、彼に感情をぶつけても意味が無い」

「それでも駄目なんだ。彼はいい人間ではない。恐らく今までであった中でもっとも人間から離れた何かだ!!」

「完璧な正義を持った人間なんてどこにもいないんだよ。貴女は完璧を求めすぎなんだと思う」

「じゃあなぜお前はこいつを信じる!?!」

「私は夜戦しか能がない馬鹿だからね。難しい事は考えられない。妹達が提督の事を信じるって言うから、私も信じたんだよ。それ以上でも以下でもない。私個人の感情なら正直どつちでもいい。けれど、妹達の事は裏切りたくない」

「私は……」

「いいじゃないか長門。少しくらい信じてみようよ。彼のことかどうしても嫌いなら、

赤城さんが持っている提督の銃をくすねてくるよ。それで撃ち抜けばいい。貴女が出来ないなら私がやってもいい」

私の中で何かが折れる音がした。

「泣いてもいいよ。此処には私しかない。提督は記憶があるわけない。提督が重そうだから早く退いてあげなよ」

私は泣いた。前の提督になにをされても涙は流さなかつた。齒を食いしばって我慢をした。それが決壊したのだ。止まるわけがない。

この場所には川内しかいない。彼女は余計な事を言う事はないだろう。此処で思う存分泣き喚いたところで誰にも気付かれない。

堰が切れたように涙が溢れてくる。子供の様に声を上げて泣いた。誰にも気付かれない。私の泣き声しか存在しない。

今この瞬間、私がどれだけ小さな存在なのか気付かされた気分だ。惨めだ。でもそれ以上に安心してゐる。少しばかり付き合つてやろう。

「夜はいいよね、夜はさ」

ありがとう提督。そして川内。

#####

「私一人で提督を運べると思ってたけど結構重いな」

長門が泣きじやくつて使い物にならないので、一人で提督を運ぶ事にした。それが間違いだった。提督と言つても男だ。そこそこ思い。

「筋肉馬鹿の長門にでも手伝つてもらいたいよ。提督をこんなにしたんだから責任とつて運ぶくらいはして欲しかったね」

独り言を言つても誰もいないので聞いている人間は誰もいない。

「夜はいいんだけど、こんなときはもう少し人手が欲しいよね」

|| || || || || ||

提督を執務室まで運び終えると、日付が変わろうとしている時間だ。

「とりあえず手当てだよね」

提督を執務室に敷かれた布団に寝かせる。適当にぬらしてきたタオルで顔を拭き、傷を洗う。

「結構酷いな。長門もやりすぎだと思うよ……」

筋肉馬鹿が力任せに殴つたのだ。顔は腫上がって私の知っている提督の顔ではなく

なっている。

「……………君が……………川内かな？」

提督が目覚めたみたいだ。

「そう、私が川内だよ。はじめましてだねっ。提督」

「そうか。色々ごめん。君が此処まで僕を運んでくれたんでしょ？」

傷に良くないからそんなに喋らないでほしいな。

「そうだよ。結構重くて疲れちゃったよ。一つ貸しだね」

「そうだね。一つ貸しだよ」

提督が不細工な顔を歪ませて笑う。殴られてそんな顔をする人ははじめた見たよ。

「提督は無理しすぎなんだよ。艦娘、よりによつて筋肉馬鹿の長門に殴られるなんて骨くらい持つていかれてもしようがないと思うんだけど……………」

「筋肉馬鹿つて酷いな。彼女だつて考えてるんだよ。自分なりにね」

「それなら提督は筋肉馬鹿よりもさらに馬鹿だよ。どう考えても大馬鹿者だよ」

「それは笑えてくるな」

「そうでしょ。凄い馬鹿だよ」

提督は馬鹿で、何を考えているかわからなくて、それでも必死に自分なりに蹴っている。真つ暗な道を月明りだけで頼りに必死に歩いているんだ。

「今夜は綺麗な月だ。鎮守府に来るまで夜空を見上げる事なんて殆どなかった」
「なにそれ？私に告白？」

それはそれで面白い。傷ついた提督とそれを助ける私。吊橋効果なら十分だ。
「それは面白いな」

提督はまた顔を歪ませる。

「そろそろ寝なよ、最低限の治療はやったから。明日皆に驚かれると思うよ。そんな顔」
「それもそうだ。体のほうも結構ガタがきている。正直限界だ」

「明日赤城さんや加賀さんに見てもらおうといいよ」

私よりもそれなりに治療してくれるだろう。

「治療は問題ない。こう見えても医療知識はある。だから今はこのままでいい」

「そう。それなら大丈夫なのかな？」

「そういえば軍医上がりだったと神通達から聞いた。元医療従事者の言う事ならば信じよう。」

「川内、ありがとう。君も僕についてきてくれるのか」

「私はね、どっちでもいいんだ。妹達が決めた事に従うんだ。長門が筋肉馬鹿なら私は夜戦馬鹿。夜戦が出来れば何でもいい。だからこれからも夜戦をする。提督の事なんて正直どうでもいいんだよ」

長門に言った事をそのまま言う。

「それでも夜戦をさせてくれる間なら、私は彼方に従います」
それは本当だ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

「今日は本当に月が綺麗だ」

「そうね。月は綺麗ね」

提督は眠りに落ちた。

第九話 気分高揚

朝六時。そろそろ起床の時間です。

提督は朝が大変弱いので、私達が当番制で起こしています。今日の当番は私です。

それでは早速執務室へ行きましょう。提督は執務室で寝ています。何も無い鎮守府なので、提督が寝る場所も執務室です。執務室に自分で持ってきた畳の上に布団を敷き、寝ています。

「おはようございませす、提督」

返事はありません。わかっています。掛け布団を剥ぎ取り無理やり起こします。

「提督起きてください!!」

掛け布団を取ると川内さんと提督がいました。提督が寝ているはわかるのですが、どうして川内さんと一緒に寝ているのでしょうか。

提督ならば、艦娘相手に不埒な真似をしないと置いていましたがどうやら見込み違いでした。

とりあえず加賀さんと呼んできましよう。

|| || || || ||

「赤城さん、これはどういうこと？」

「凄い表情で加賀さんが提督と川内さんを見ています。」

「わかりません。提督を起こしに来たらこのようになっていました」

「それに提督は包帯を巻いています。」

「赤城さん、もしかすると提督は川内さんと人には言えない事をしていたのかも知れません。包帯はそのときの傷を隠すためです。」

「人に言えない事とは何なんでしょうか？」

「………つ。私の口からはとても言えません」

「加賀さんは顔を赤くして下を向きました。何を考えているのでしょうか？」

「どちらでもいいです。とりあえずは提督と川内さんを起こしましょう」

|| || || || ||

「そう言うわけで提督と一緒に寝ていたと？」

「そうだね」

「なるほどつて、納得できますか！」

加賀さんが感情を出して話します。最近感情を出すようになりました。

「仕方ないじゃないか。提督をそのまま放置してたかもつとひどい事になっていたと思うよ」

それもそうですね。

「それに妖精さんの力を借りて傷のほうは殆ど塞がっているとと思うから、ある程度は大丈夫だと思うし……」

「だからと言って提督とい一緒に寝ていいわけではないでしょう」

加賀さんの言い分もわかりますが、川内さんの介護が有ったからこそ、重症ではないと考える事も出来ます。

「赤城さんからも言つてやつてください」

私はどちらかという川内さんに感謝しているんですけど……

「加賀さん、とりあえずは川内さんに感謝しましょう。提督の手当てをしていなかったらもつと酷い事になっていました。それに今は争っている場合ではありません」

こんな些細な事で争つては意味がありません。今、身内同士での揉め事はなるべく避けたい所です。

「それよりも提督、昨日の事でお話があります」

「簡単に説明するとだな……」

私は提督に昨日の夜の事を聞きました。長門さんと何をしたのかと……。

#####

まったく持つて提督は滅茶苦茶です。

生身の人間が戦艦に殴られるなんて訳がわからない事をやります。もし川内さんがいなければ、あの場で提督は死んでいました。

生きているだけいいですけど一歩間違えれば無残な姿で発見されていた事でしょう。

「加賀さん。いい加減期限を直したらどうです?」

赤城さんはそんな事を言いますが私は納得いきません。

「それよりも提督は無事だったんですから。今からの事を考えましょう。まずは御飯を食べるんです」

この人は最近食欲で動いている節がありますね。

赤城さんの言っている事もわかるので、とりあえずは御飯を食べましょう。

|||||

「提督大丈夫ですか！」

提督の傷を見て駆逐艦の子達が心配そうに提督を見えています。

「まったく提督は信じがたい事をするよね？」

「戦艦に生身で挑むとは………。感服いたします、指令」

一人だけちよつと違った考えをしていますね。

「まったく何をしてるのよ。長門に喧嘩売って無事に帰ってきただけでも立派だわ」

陸奥さんも感心するのは違うと思いますが……。

「まあまあ、僕が無事だったしいいじゃん？それよりも妖精さんって凄いな。人間でも

ここまで治療できるんだから」

「一応人間相手にも治療行為は出来ませんが、今回限りにしてください。艦娘と違い、人間を治療する事は何度も出来ません。今回限りの奇跡と思ってください」

一応妖精を用いた治療は人間相手にも出来るが、そもそも妖精は人間相手に出来るようには出来ていない。

人間を治療する場合は、艦娘の力を用いても普段以上の力を使う。

恐らく川内さんは、今もっている力の殆どを提督の治療に使ったのでしよう。食堂に誘いましたが、まだ眠いらしく、寝ています。彼女の場合、この時間は何時も寝ていま

すが、普段ほどの元気はありませんでした。当分出撃は出来なんでしょう。

「みんな心配させてすまないな。僕はもう大丈夫だから気にしないでね」

提督は言いますが……。

「それじゃあ今日もみんな仕事をしていこう！」

＝＝＝＝＝

提督は私達に本日の業務を指示していきます。

「加賀は僕と一緒に来てくれ。それ以外は解散」

提督と私だけが食堂に残ります。

「提督、私の仕事はなにかしら？」

「今日は町に出て買出しをしようかと思うんだよね」

町に出る？買出し？

「そろそろ食材がなくなってきたね。思ったよりも君達が食べるから、予想よりも早くなくなったよ」

仕方ないです。提督の料理は大変美味しいのですから。しかし少し恥ずかしいですね。

「それならば仕方ありません」

「準備ができしだい正門に集合。久しぶりに外だね」

準備と言つても私は大丈夫なのですが……。

|||||

「加賀、その格好は目立つ気がするんだけど……」

なにが目立つのでしょうか？

「その弓道着みたいな格好は目立つちやうから、スカート短い」

「どこを見ているのですか？」

「……一応艦娘は軍事機密になるんだよね。僕はばれてもいいけど、偉い人たちがどうしてくれるかわからないからね。身元はなるべくばれないようにしないと」

なるほど。提督の言い分もわかりませんが。

「しかし私達は、これ以外の服服装など持っていません。あとは提督からいただいたジャーズくらいのもんです」

「今回はそれでお願いますよ。今度服も買いに行かないとね」

「わかりました。少々お待ちください」

||
||
||
||
||

「これでいいでしょうか」

「結構結構。それじゃあいこうか」

「しかしここからどうやっていくのでしょうか？公共機関などは通っていませんが……」

心配ないよ。僕の車で行こう。

「わかりました」

少し歩いたところに車はありました、鎮守府の近くの空き地にひっそりと隠れるように置いてあります。

「僕が脱走しないようにって考えてたのかもしれないけど、何とか持ってこれたんだよね」

提督が脱走しないようにって提督は大本営からどのように思われているのでしょうか？

「久しぶりに、かつ飛ばすか」

青く光り輝き、リアウイングがいかにもスポーツカーらしさを演出します。私は好き

です。

「この車は速そうですね、提督。気分が高揚します」

「わかつてくれたか。この車は昔天山のエンジンも作つてた会社なんだぞ。海軍に縁があるんだ」

「そう言うことですか。なんと読むのでしょうか？ STi?」

「車の事は今はいいか。行くぞ加賀。」

この後私は地獄を見ました。時速200キロで町までの山道を駆け抜けていくとは思いませんでした。公道で出す速さではありませんと注意しましたが、意味はありませんでした。

警察も軍の管轄の山でも見回りぐらいはして欲しいものです。

|| || || || ||

「大丈夫?」

「これを見て大丈夫だと思いますか・・・?」

提督の車は恐ろしいくらい速かったです。何度死を覚悟したかはわかりません。

「帰りは私が運転しますので提督は助手席に乗っててください!!」

「加賀運転できるのか？MTだぞ？」

艦娘に成り立ての頃、希望所には免許講習があります。希望と言っても、軍にいる限り、ある程度、乗り物は運転できないといけないのでほぼ全員取りますが。重巡洋艦以上の艦娘は殆ど持っていると思います。

「それなら加賀に頼むよ。」

「じゃあ買物に出発だ」

提督は予め予定があるのかメモを見ながら歩き出します。

「まずは……」

提督の後を追います。

提督の車に乗っていたので忘れていましたが、私は町に来たのは初めてです。色々と面白いものが見れそうです。

柄にもなく楽しんでますね。任務ですので引き締めていきましょう。

|| || || || || || ||

午前中に食材以外の買い物を終えました。車に入りきらないものは、後日、配達してもらおうそうです。

しかし、鎮守府にいらぬ物が多かった気がします。

「これ美味しいですね」

私達は、定食屋に來ています。

「加賀もいるし、いいところにいきたかったけど、財布事情がね。経費で落ちるかどうかわからないしね」

経費で落ちない物ばかり買っていた気もしますけれど。

「今度は美味しい物を食べよう。そのときはみんなも一緒だ」

「わかりました」

赤城さん達と町へ来る事もあるかもしれませんが。楽しみです。

「この後、食材を買って終わりかな。その前にちよつと知り合いに挨拶していくか」
わかりました。

「それを食べたらいこうか」

わかりました。

「提督、この白玉餡蜜も頼んでいいでしょうか？」

「お前なあ」

來るときのお返しです。これくらいはいいと思います。食べてみたかったです。食い意地が張っているわけではありません。

|| || || || ||

提督は同じくらいにの男性とお話しています。

どうやら昔馴染みたいです。

「それじゃあ頼んでた通りによろしく」

話し合いも終わったみたいです。どうやらある程度、話は纏まっていたみたいです。

「明日から加賀を頼む」

「よろしくお願いします」

私を頼むとはどういうことでしょうか？

「聞いてなかった？明日から加賀は鎮守府勤務じゃなくてここに勤務するの。」

聞いてませんし、私は艦娘ですよ!?

「色々やっていると金が尽きたから加賀が食費くらいは稼いでもらわないと。一応日当で渡してくれるから大丈夫だよ。」

「大丈夫では有りません!私のいないと所で話を進めないで下さい」

それに私が労働ですか?今まで働いた事なんてありません。

「いいから、いいから」

提督は、軽く挨拶をして、店を後にします。

「待ってください提督！まだ話の途中です!!」

提督は私の事など気にもせず、歩きます。

「何とかなるよ。大丈夫だよ。加賀ならできるよ」

そういわれましても……。

「次は食材だの買出しだね」

提督は人の話を利く気がないようにです。

#####

「提督お帰りなさい」

提督と加賀さんが帰ってきました。

「どこへ行っていたのですか？」

「ちよつと町まで。色々買い物ね」

「いいですね。私は町まで行った事がないので加賀さんが羨ましいです」

しかし加賀さんは何故かげつそりしています。

「それにしてもどうして加賀さんはそんなにやつれているのですか？」

「車を運転したの。アクセルを踏んで十秒もしないうちに可笑しな方向にメーターが向

くの……ふふつ」

これは壊れていますね。

「それに私、明日から労働者になるわ。艦娘が労働って……」

「提督色々と聞きたい事はありますが、加賀さんが壊れた理由って提督にありますか？」

「そんなことはないと思うよ」

「……」

間違いなく提督に問題があるみたいです。

「明日から毎日通勤……。錬度を上げなければ、間違いなく死ぬ。どうにかしない」

さつきから加賀さんが何かを言っていますが、気にしてはいけないと思います。

「赤城、今日の業務はどんな感じ？」

提督が加賀さんを放置して私に聞いてきます。

「順調みたいです。川内さんが先ほど起きて何処かへ行ってしまったが問題はないと思います」

「なら良かったよ。それと赤城、加賀をどうにかしてくれ。さつきから五月蠅いんだ」

はあ。

「直線は大丈夫、問題はカーブ。それさえクリアしてしまえばあの車を乗りこなせる」

「加賀さんは提督の車が入ったみたいですよ。色も青色でかっこいいですし。私は好きですよ」

「うれしいね、そう言ってくれるのは」

「今度は私も町へ連れて行ってくだささい」

「そうするよ」

後に町までの峠を爆走する、青い一航戦が産まれた瞬間でした。最速で山道を駆け抜ける話はまた次の機会に。

